

国指定史跡

伊豆市上白岩遺跡

上白岩遺跡発掘調査報告書(1979年)を読む



伊豆市上白岩の国指定史跡 上白岩遺跡は、今から 3000年～4000年前の縄文時代中・後期の遺跡です。この遺跡の特徴は配石遺構を持った(環状列石)と集落群として伊豆地域の代表的な縄文時代の遺跡です。(市のパンフレットより要約)



上白岩遺跡は、川原石や山石などの石塊をもって一種のまとまりをなして配された配石遺構、地表面に穿たれた墓穴としての土壇、幼児などを埋葬したと思われる埋甕、そして竪穴住居からなる、墓地遺跡といえる。そして、多くの配石遺構群と土壇群とのほかに、これら単位群が環状に集合した環状列石(積石)が本遺跡を特徴づけている。

また、この県東部伊豆地域に於ける、配石遺構は愛鷹山麓地域から伊豆半島東部地域に分布しており、富士川を道筋に甲府盆地や八ヶ岳山麓の地域との交流を見て取れる。本文147p 抜粋 (一方、加曾利式土器などの出土は、柏峠や伊東などを經由したものと考えられ、多摩川流域との交流はこの遺跡の特徴とも考えられる。)

町田市田端環状積石遺構(東京都)-都史跡

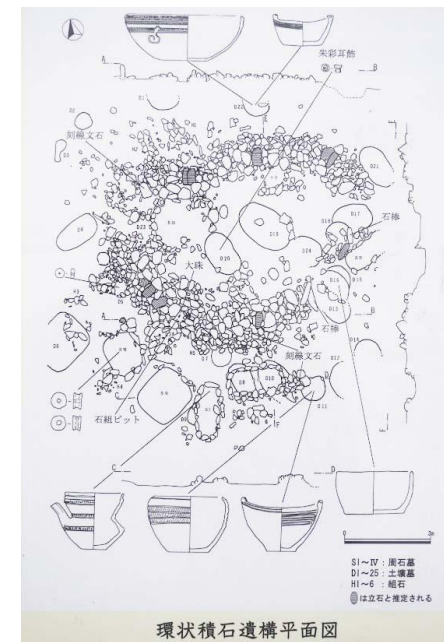


複製展示された環状積石遺構

似たような遺跡

町田市田端環状積石遺構は東京都町田市に所在する、縄文時代後期の周石墓と土壌墓、後期から晩期(約3500年～2800年前)にかけての環状列石からなる遺跡です。

環状列石遺構は大小の自然石を帯状に積み上げ、東西に約9メートル・南北に約7メートルの楕円形を呈しています。また、この周辺の遺跡の特徴として、山梨の釈迦堂遺跡から中央道沿いの縄文文化圏の延長上にあることをみてとれます。



大湯環状列石・万座環状列石(秋田県鹿角市)-国の特別史跡



万座環状列石



大湯環状列石は、秋田県鹿角市十和田大湯に所在する2つの環状列石(野中堂環状列石・万座環状列石)を主体とする縄文時代後期(4000年前)の大規模な遺跡です。野中堂環状列石は最大径44メートル、万座環状列石は最大径52メートルで、それぞれの列石は石を様々な形に組み合わせた配石遺構が二重の環状を形成しています。

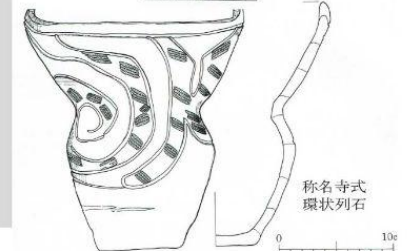
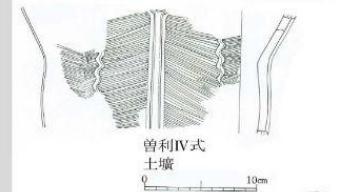
これまでの発掘調査により、環状列石を構成する配石遺構は「配石墓」であり、その集合体である環状列石は「集団墓」と考えられています。

縄文時代の時代変遷と上白岩遺跡の時期

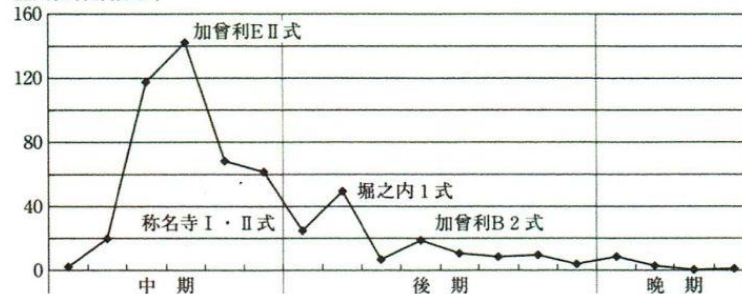
縄文時代	おもな出来事 ○は県内	一般的年代観	中部・関東の縄文土器編年
草創期	土器、石鏃を使用しはじめる 定住の始まり 木の実などの貯蔵、燻製づくり ○芝川町大鹿窪遺跡で定住生活が始まる	13000年前～ 3000年間	省略
早期	列島で定住生活(竪穴住居)が普及 集団墓地の形成、墓への副葬 気候が温暖化し、海水面が上昇 貝塚の形成	10000年前～ 4000年間	省略
前期	6・7千年前、縄文海進ピーク 遠隔地との交流が活発化 大規模縄文集落の発達 漆の利用技術の発達	6000年前～ 1000年間	省略
中期	「クリの栽培」広がる 環状集落の発達 中期後半人口のピーク ヒスイやコハクなどが流通し交易が盛んになる 敷石住居出現 ○伊豆の国市上白岩遺跡で環状列石が作られる	5000年前～ 1000年間	勝坂・阿玉台 中峠 加曾利EⅠ(曾利Ⅰ～Ⅱ) 加曾利EⅡ(曾利Ⅱ～Ⅲ連弧文) 加曾利EⅢ(曾利Ⅳ) 加曾利EⅣ(曾利Ⅴ)
後期	4千年前、寒冷化がはじまる ○浜松市の蜷塚遺跡に貝塚が形成される 土偶・石刀などの祭祀具が盛んに 環状列石をもつ墓地、祭祀場が発達する 東日本では大規模集落の崩壊 水場でトチなどのアク抜き 塩の生産はじまる 遮光器土偶や土面などが多く作られ装身具も多用	4000年前～ 1000年間	称名寺Ⅰ・Ⅱ 堀之内1 堀之内2 加曾利B1 加曾利B2 加曾利B3 曾谷・安行1 安行2
晩期	○川根本町の上長尾遺跡で遮光器土偶を用いた祭り 寒冷化	3000年前～ 2700年間	省略

遺跡の時期

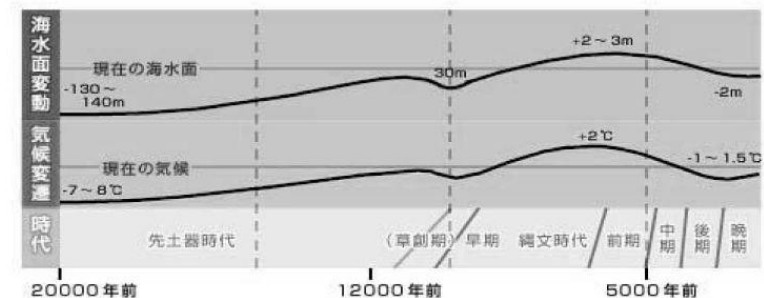
上白岩遺跡出土土器



竪穴住居跡数比率



京葉地方東京湾東岸(船橋・市川・松戸・鎌ヶ谷・千葉・市原市)の縄文中期以降竪穴住居跡数比率の変動



遺跡の年代と性格

この遺跡形成は縄文中期から始まっているがその中心は縄文中期後半から後期初頭にかけてである。

住居址については加曾利EⅢ～EⅣ、土壙・配石遺構は加曾利EⅣ～称名寺式期にその中心がある。したがってこの区域では、中期後半の集落が中期末～後期にかけて、墓域へとその性格が変化したことを示している。

配石群

柄鏡形敷石住居
3号住居

住居跡

埋壙
1・3・4・5・6号

壙被り葬
2号埋壙

土壙群

環状列石(積石)

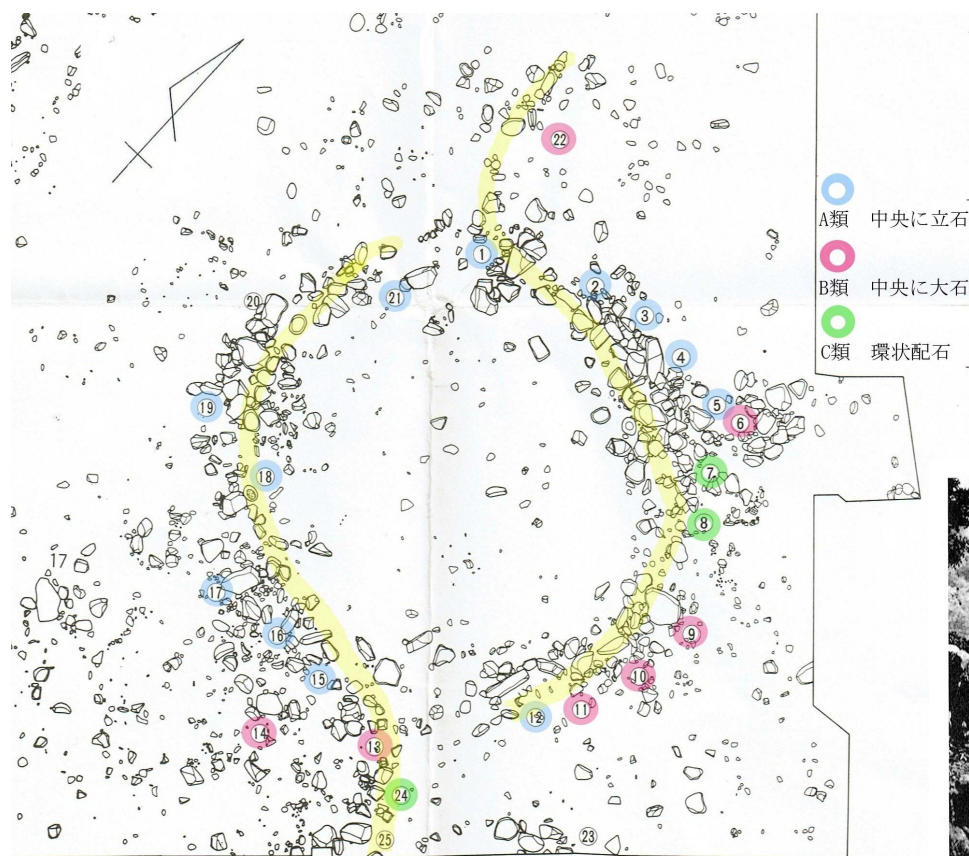
遺構時期別集計表 (遺構区域内の遺跡の変遷)

出土土器	縄文時代中期後半(～4000年前)			後期初頭
	加曾利EⅡ (曾利Ⅱ～Ⅲ)	加曾利EⅢ (曾利Ⅳ)	加曾利EⅣ (曾利Ⅴ)	称名寺
住居址		3	3	
埋壙			5	
土壙	1	13	27	29
配石遺構			13	→ 8
環状列石(積石)				

縄文時代配石・土壙・住居分布図

環状列石(積石)遺構について

環状列石(積石)遺構はA地区の北半に検出されたもので、直径 12mのほぼ円形に検出されている。環状部は 25単位程の組石遺構により構成されており、そのほぼ中央が二か所で切れている。それにより、環状列石(積石)遺構は大きく南・北の弧状に分けることが可能である。各配石はその形より、(A類)中央部に立石を配し、その周りに石塊を配しているもの。(B類)中央部に大石を配しそのまわりに石塊を配しているもの(C類)環状に配石しているもの等に分類できるが、多くはA・B類に見られるように中央に大きな石を置き(立て)、その周囲に石塊を配したものである。環状部の配石の下に土壌が存するか否か、全面的に調査が終了したわけではないので、必ずしも明確でないが、土壌の存するものも見られ、又配石の直下に土壌が見られないものも配石の周囲に土壌が多数検出されているので、これらの配石と土壌は密接な関係を有するものと思われる。これらの遺構は伴出している土器より縄文中期末(加曾利 EIV 式期)～後期初頭(称名寺式期)にかけて形成されたものと考えられる。……(本文 145p)



上白岩環状列石(積石)遺構

複製展示されている町田市田端環状積石遺構に見る例示

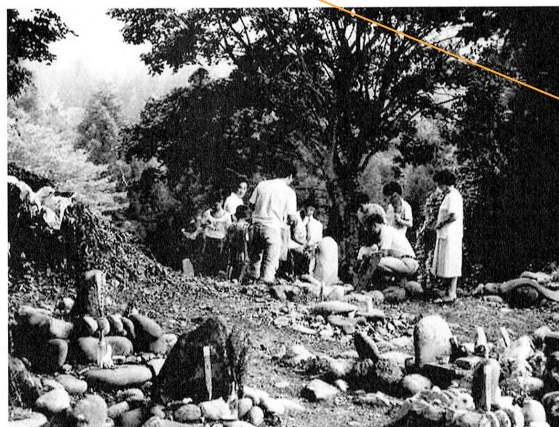


図6-6 新潟県北三面ダム水没前の配石墓地



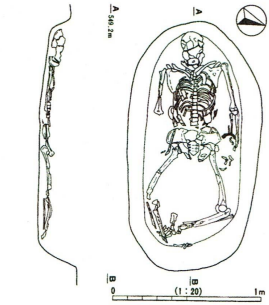
最近まであった配石墓地

上白岩遺跡に見られるさまざまな墓

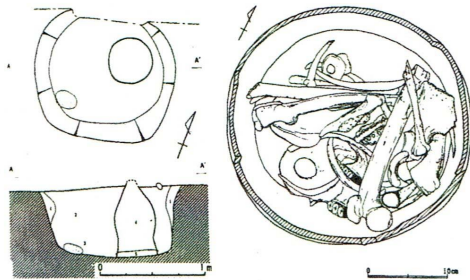
土墳墓

遺骸を直接に埋葬するために、地表面に墳穴を掘ったものである。遺骸を埋葬する最も簡単な方法でもある。

土墳墓は各時代を通じて行われている。特に縄文時代には各時期にわたって広く行われた。屈葬と伸展葬との場合の土墳墓は、それぞれ、大きさや形状も異なり、長楕円形・楕円形・扁円形などが多い。また底は平底のものもあり、皿状に中くぼみをなすものもある。現在発見されている事例には、屈葬のものが多い。屈葬例の場合大人の男性の場合で長径が最大が1メートル半程、最小で65センチ程で平均が1.1メートルほどであった。**上白岩では長径1.2メートル深さ0.3メートル程**



土坑墓（縄文時代後期・長野県北村遺跡）



土器棺墓（縄文時代後期・埼玉県坂東山遺跡）

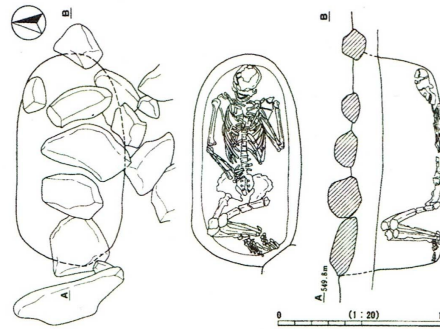


埼玉県比企郡嵐山町
行司免遺跡

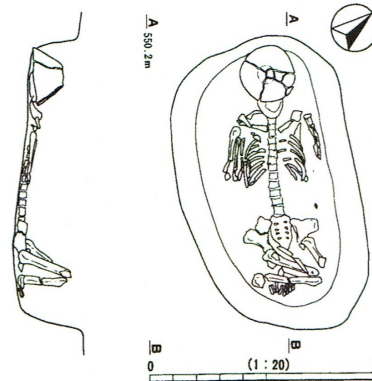
埋甕（幼児棺・土器棺墓）1・3・4・5・6号埋甕

甕に限らず地面に穴を掘り据え置いた土器、あるいはその遺構をいう。一般に「うめがめ」と読み、竪穴住居の炉の中に土器を据えたものは埋甕炉「まいようろ」と読む。

埋甕は完全な形の土器、あるいは一部を欠損した土器を土に埋めたものをさし、底を故意に壊して内抜いたり、底面を穿孔した例がある。縄文時代には深鉢型または甕形の土器に胎児・乳児・小児などの遺骸を納めた例があり幼児棺と呼びたい。幼児棺葬の意義は、死産児や乳児・小児は一個の人格と認めずに母の一部であるとの考えのもと、再生を願い母胎に似た甕に入れて埋葬したと考えられる。



配石墓（縄文時代後期・北村遺跡）



甕被葬（縄文時代後期・北村遺跡）

甕被り葬 2号埋甕 抱石葬

遺骸を埋葬するのに際して、その頭部などに甕の完成品やその破片をのせたり被せたりするもの（甕被り葬）。また、胸部の上などに石塊をのせ、あたかも両手で石を抱かしている状態にしたものもある（抱石葬）。

これらに共通する観念には、やはり死体を恐怖し、その再帰を防止しようとする考えがあった事を認めてもよい。しかし、この考えとともに甕被り葬には遺骸を丁寧に扱うというより複雑な心性もふくまれていたとみなされる。

配石墓

遺骸を土中に納めて埋めてから、その上に自然の石材を配するものである。墓としては縄文時代から現代に及んでいる。

ここにいう配石墓は、地上に表れているものを対象にし、いわば標識的な意味をもつものである。配石墓は大きく分けて環状的配石と組石式配石に分けられる。

* 環状的配石 従来、環状列石またはストーンサークルなどといわれているものである。これは、されに2つに細別され、A) 石材を環状に配列し、その中央の積石遺構に墓墳があるもの。（北海道忍路遺跡）B) 組石の一単位があり、多くの単位の組石が環状にならぶもの、組石の一単位が一つの墓であり従って環状の墓地ともいえる。**上白岩遺跡・秋田県鹿角大湯遺跡**

* 組石式配石 丸い石塊や長方形の石材、平たい石または割り石などを、方形または円形・楕円形・菱形に組み合わせたもので、この中心に長方形の石財を立てたり、平たい石を置いたものがあり、組み合わせで様々な形がある。

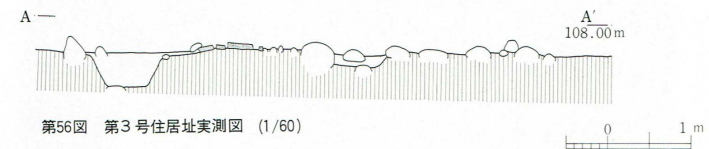
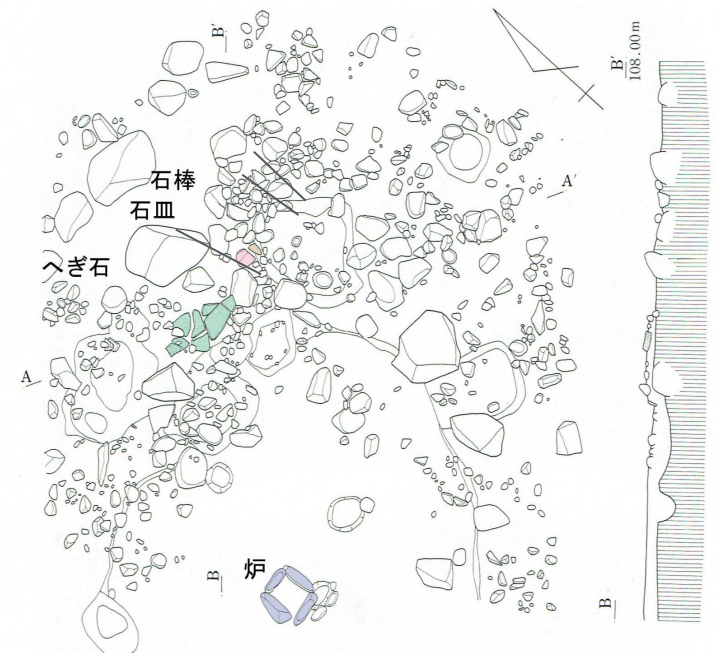
第3号住居址 について

第3号住居址は、第1号・第2号住居址と重複し、1号・2号よりも新しい。本住居の大半は深耕のため、検出状態は良好でなかったが、敷石住居址である事が確認された。第4号・第5号の土壌の北側に7枚のへぎ石が敷かれており、第2号・第3号土壌内・第1号住居址覆土からもへぎ石が見られた事から広範囲に敷かれていたと思われる。へぎ石が敷かれている所から北に約20cm～40cmの幅で4.2mの長さを有した配石が見られる。この配石は拳大～約30cm大の河原石を敷き、この中央部には石皿と石棒が各1点出土しており、へぎ石と同じく本住居址の床面である可能性がある。(本文36p)

柄鏡形敷石住居址 とは

床面に平石を敷いた住居址状遺構。縄文時代中期後半から後期前半にかけて関東・中部地方にみられる。直径5メートル前後の円形または方形に扁平な川原石・平石を敷き詰め、中央に石囲い炉をもつものが一般的である。周辺部の一部が張り出した柄鏡形のものなどがある。敷石住居址からは埋設土器の他に、石棒、凹石、石皿、石斧、敲石が出土することが多く、共同祭式の場や、祭祀場説をとる人もいる。(コトバンク 十菱駿武)

※ 3号住居址では、同じ場所に三度も住居を立てていること、石棒・石皿なども出土していることを考えると重要な建物であった事も考えられる、またへぎ石などが2～40cmの幅で4m程の長さの配石などから、柄鏡式住居であったかも知れない。自分たちにもなじみの深い自家の墓所とお寺のような関係だったと考えたい。(足立)



平塚市上ノ入遺跡(敷石住居)

上白岩遺跡からはたくさんの土器が出土していますが、この中にはこの土地以外の場所で作られ運び込まれた土器や、その破片が多くふくまれています。

縄文土器の場合、素地土に含まれる砂などの混和材の割合が2～3割と多いそうですが、縄文土器の場合採取された粘土の精製度が低いいため、あえて混和材をまぜる必要はないという人もいます。しかし、いずれにせよ土器の作製に際し、粘土には砂などの混和が必要で、その砂に含まれる岩石鉱物の割合は地域や場所によって大きく変化しますので、土器に含まれる砂などの岩石鉱物の含有率を調べればその土器が何処で作られたのかが推定できるわけです。

以上の結果から、本遺跡の場合、甲府盆地系(八ヶ岳山麓)の土器の他に、多摩川系の土器が多く、土器の60%が外の地域からもたらされていることがわかります。

諏訪湖

八ヶ岳

井戸尻遺跡

釜無川

上石田遺跡

吹川

御坂山地

富士川

早川

丹沢山地

箱根山

酒匂川

相模川

駿河湾

三保

狩野川

上白岩遺跡

天城山

加曾利式土器

青梅市内遺跡

多摩川

0 10 20 30 km

● 採集地点
○ 遺跡

出土土器の作製地

河川砂採集地点図

上白岩出土土器

加曾利II期 埋蔵 10m

加曾利IV式 3号住居跡 10m

第1号住居

39% 26% 35%

ハケ岳南西麓 多摩川中流域 上白岩周辺

気候変動と住居・遺跡の変化

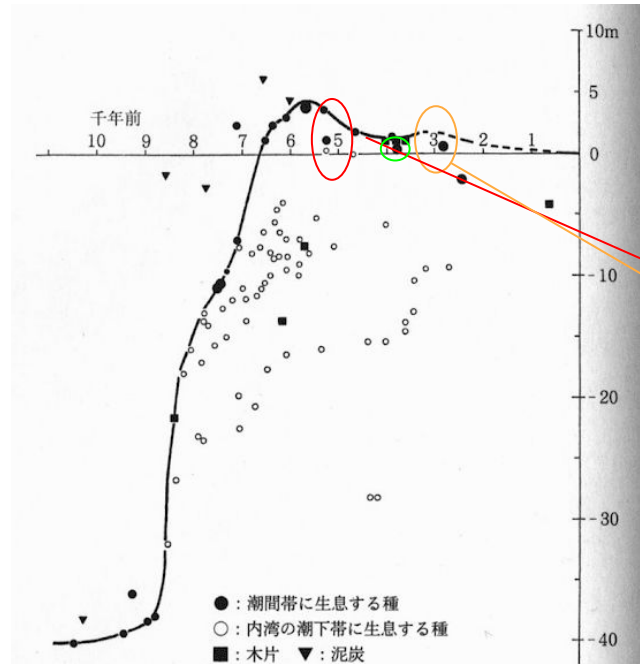


図3-1 多摩川・鶴見川下流域から横浜港周辺における約1万5000年前以降の相対的な海面変化曲線（松島，1996）

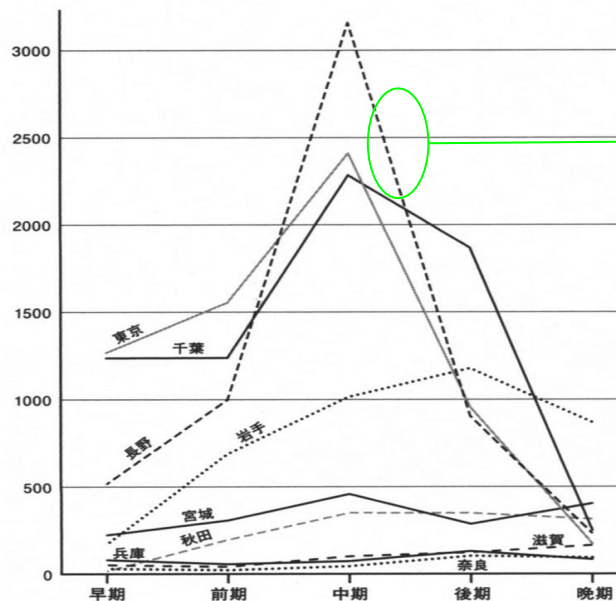


図 51 縄文時代の時期別・地域別の遺跡数

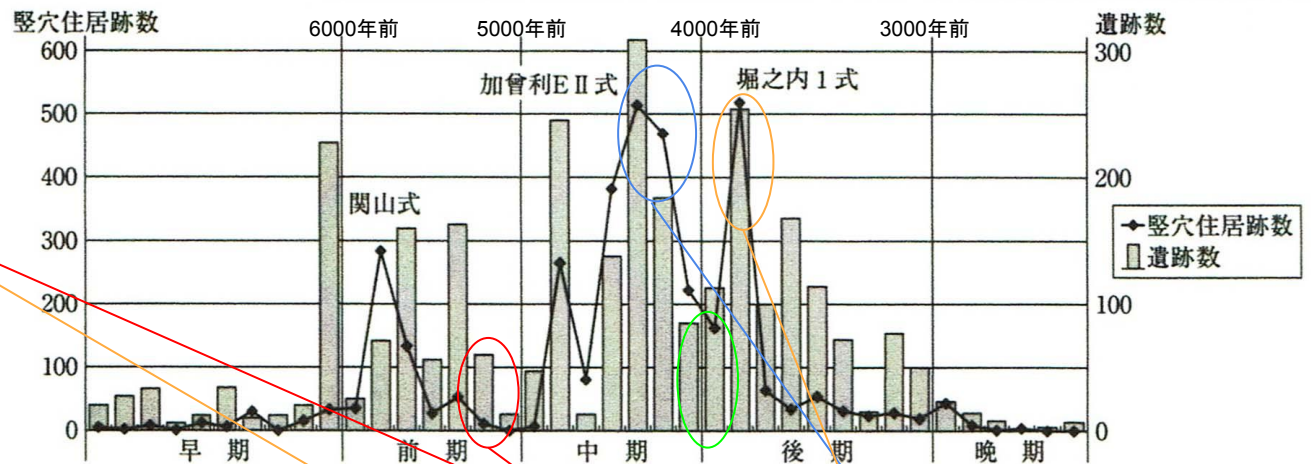


図 5 京葉地方東京湾東岸（船橋・市川・松戸・鎌ヶ谷・千葉・市原市）の縄文時代遺跡数と竪穴住居跡数の変動

南関東地方で遺跡数がもっとも落ち込む縄文前期末葉から中期初頭が、急速な寒冷化の始まりである。寒冷化は中期を通じて進行したようだが、中期中葉は文化的な上昇期であり、遺跡数が急増した。安田喜憲はこの状況を、前期以来の内湾性集落が気候変動によって衰退したかわりに内陸部でもに植物食に依存する集落が発展したためと説明する。この解釈が正しければ、気候の寒冷化と文化の衰退が結びつくとは限らない一つの例となりうる。しかし、遺跡の消長と気候変動には相関関係も大いに認められる。中期末から後期初頭がそれ以来の最寒冷期であり、ついに耐え切れず中部高地では壊滅的な崩壊を引き起こして遺跡が激減するが、小海進がある後期前葉には南関東地方では遺跡数が増加して大規模化し、再び強い寒冷化現象がおとづれる晩期は集落・竪穴住居の激減期である。というように。 設楽博巳（民博研究報告第112集・再葬の背景より）

「紀元前2300年（今から4400年前）のころ、日本には26万人が住んでいたといわれます。原始時代としては高度な狩猟採取経済を営み、限りある空間を最大限利用していたと考えられています」。住居跡などから割り出してみると、日本の人口密度は狩猟採取社会としては世界一高かったといわれる。ところが縄文時代も晩期に入ると、その人口は一気に減少する。それも26万人の人口が、8万人にまで落ちてしまう急激な減少だった。原因は、気候変動で気温が下がり、食料供給量が激減したこと、クルミ、ナラ、トチ実、・・・貴重な食料であつたナッツ類が気温低下の影響を受けて激減してしまう。そして食料の供給量に合わせるように人口はみるみる減っていった。鬼頭 宏（静岡県立大学学長 インタビュー記事）

出土土器の較正年代 約4,800年前～4,200年前の600年間

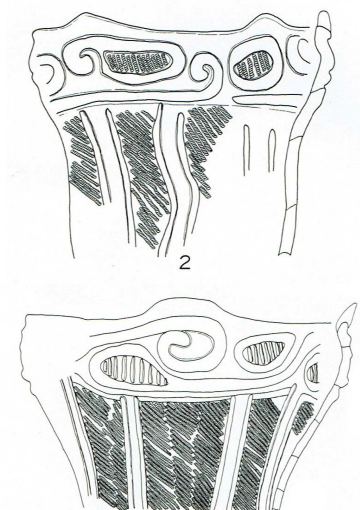
79年度版調査報告書に基づき、出土土器の形式やその編年を、調べてみると、調査報告書の出版時の認識と、現代の認識では多少異なっている。

例えば、報告書では加曾利式土器とされているものに曾利式の特徴が強く見て取れたり。また、出土土器の較正年代についてインターネットなどで調べてみると、遺跡の始まり頃の加曾利EⅡ式は関東では4,810年前頃から、この遺跡の終末期の称名寺Ⅱ式では千葉地域では4,235年前頃終わる。つまり近隣地域の遺跡で出土した同様の土器の最近の較正年代をつきあわせると、上白岩遺跡の始まりは今から4,800年前頃、終末は4,200年前頃の約600年間位になる。したがって、報告書の年代観よりも300年位遡ってしまう。集落の発生と終末の傾向は、「気候変動と住居遺跡」の変化で例示した京葉地方東京湾東岸の縄文時代中期の遺跡数・住居数と同様な傾向が見てとれ、上白岩遺跡の盛衰も京葉地方東京湾東岸の流れと同様の中、ひとつの遺跡であったと考えられる。

600年間続いたと考えられる上白岩遺跡において、発掘された範囲の中の住居数を考えると、素人考えでは、遺構の集積は随分とまばらであるように思えるが、いづれにせよ墓所をこことして、ここをふる里として、明日の幸福を先祖の霊に願った多くの人々が此処にいたことは確かである。(足立)



加曾利EⅡ式土器 4,810年前頃



上白岩遺跡出土
加曾利EⅡ式土器

上白岩遺跡の終焉とカワゴ平パミス(軽石)約3000年前

上白岩遺跡より南に11キロメートルほど行ったところ、伊豆半島の中央部を占める天城火山の北西部にカワゴ平火山は位置する。火口は、天城火山の稜線の北側直下の標高1,100m付近にある。この火口からの噴出物であるカワゴ平パミス(軽石)は上白岩遺跡(縄文時代遺跡)が放棄されたのち、つまり縄文時代後期後葉から、晩期前半の間(絶対年代で3000年前)にかけての、ある時期に堆積した。

この大量の軽石が降下した範囲は、伊豆～東海地方のほか南関東、中部山岳地域など広範に及ぶ、その分布には偏西風の影響がほとんど認められないことから、噴火は夏季に短時間(数日以内と思われる)に生じた可能性が示唆される。(増島先生)※鹿沼土のような軽石